

2013年4月4日・週刊きたかみでは

鎮魂とふるさと再生の祈りこめ

永瀬十悟句集『橋臚——ふくしま記』

一冊の句集が送られてきた。先に2冊の詩集を送ってきたコールサック社からだ。永瀬十悟句集「橋臚——ふくしま記」。震災と福島原発について詠んだ。氏は1953年生まれ。20代から俳句を始め、長い積み重ねがある。今回が初句集。

コールサック社の発行人でもある鈴木比佐雄氏が解説「臚の美学…」を書いている。それによれば『須賀川の俳人たちは、生きていうちには句集を出さないという傾向があったらしい。もし東日本大震災・福島原発事故が起これなければ、「ふくしま」五十句を作ることもなく、その五十句によって二〇一一年「第57回「角川俳句賞」を受賞しなければ、今回の句集も出版しなかったかも知れない』と書いた。

句集には、三章で総句数四〇八句を掲載。「ふくしま」50句は第一章で震災直後の2カ月を詠んだ作品で、角川賞受賞作品。二章は「福島」以降の作品、三章は以前の作品で、春夏秋冬の四季で分けている。

タイトルになった「橋臚」は一章の「流されてもうないはずの橋臚」の句にある。喪失と幻視の有様が浮かび、悲痛な心情が伺える。「地震・津波・原発事故で失ってしまった限りない思い出を象徴している言葉」と解説する鈴木氏。須賀川の俳句の先駆者でもあり、夫人の祖父・道山草太郎にある「臚」を「蜃気楼」とし、先の表現になったとも推測しているようだ。

「鎮魂とふるさと再生への祈りを込めてまとめました」と永瀬氏。「放射線は五感では捕らえられない不気味なものです。今はここ福島に生きるものに対するいとおしさや命のかけがえのなさを俳句にすることで、その不気味さに対峙しようと考えています」(あとがき)。

と紹介されています。